

倉掛のぞみ園

特 別 養 護



倉掛のぞみ園は、閑静で居住環境の良好な安佐北区高陽ニュータウンの一角にあり、被爆者の方々が安心して心豊かな生活を送っていただくことができるよう、クラブ活動室や陶芸設備のある機能訓練室、シャワーベッドをはじめ最新の設備を備えるなど居住性に配慮されており、平成4年（1992年）7月に入園定員300人の特別養護施設として開設され、平成8年（1996年）4月から定員4人のショートステイも実施している。

所在地：〒739-1743 広島市安佐北区倉掛三丁目50番1号

（TEL 082-845-5025）

（FAX 082-845-6934）

平和を願って

今本 美代子（八十九歳）



被爆地……入市（八月八日・鷹匠町）
たかじようまち

当時の急性症状……なし

家族の死亡……父、母、姉、弟

現在の病状……高血圧症、甲状腺機能低下症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は十六歳で、五日市の実践女学校の四年生でした。学徒動員され、天満町で飛行機の尾翼に、ペラを打ち込む作業にあたっていました。工場ごと五日市に疎開することになり、工場近くの寺で生活していました。

鷹匠町（現・空鞆神社の辺り）の家には、両親、六歳上の姉、同じ女学校に通う三歳下の妹、七歳の弟が暮らしていました。幼い妹、弟は三次に疎開していました。

八月六日、朝食に並んでいた時、持っていたお碗を思わず離してしまうほどの大きな音と光、そして嫌な臭いがたちこめてきました。

それがピカドンと知ったのは、ずいぶん後のことです。幸いにも寺ではけが人もなく、建物も無事でした。それから二、三日の間に、他の女学生達は家族に連れられ、家へと戻って行きました。私を迎えに来る者はなく、両親は死んだのだと思いました。八月八日、がれきのすき間を縫うようにして、両親を探しに市内に入りましたが、家があった場所には、母のミシンがあるだけでした。その後、死亡届を出しました。しばらくして、三歳下の妹が、私を頼って寺に来ました。学校に行っていたので無事でしたが、家に帰れず、学校で過ごしていたそうです。

二人で、母の里を頼りましたが断られ、駅のベンチで寝ました。わずかに持っていたお金は闇市で使い、困った挙句、女学校の先生を頼り、畳と七輪を借り、数日間を学校で過ごしました。

その後は、袋町小学校に移動し、死体を焼いたり、炊事を手伝いながら生活しました。水道管から噴き出る水を飲み、ごさを敷いたコンクリートの上で過ごしました。女中に出た後は、十八歳で結婚し、夫のおかげで妹弟達を引き取り、一緒に暮

しました。

昔を思い出すと、今でも涙が^{なみだ}出

ますが、今は人の縁^{えん}を感じながら生

活しています。

悲惨^{ひさん}な経験が繰り返されないよう

願います。



鷹匠町から爆心地に向って

(尾木 正己撮影／広島原爆被災撮影者の会提供)

あの日

吉川 好子（八十九歳）



被爆地……南蟹屋町（爆心地より三・〇km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……慢性膵炎・変形性脊椎症・

胆嚢ジスキネジー

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は十六歳でした。父は既に他界していたので、少しでも家計の助けになればと、第一広島機関区に勤めていました。空襲警報も出ていない朝でしたので、まさか朝に敵が来ているとは思いませんでした。

八月六日は、出勤する日ではありませんでしたが、出勤することになり、自宅（旧・

高田郡志屋村^{たかたぐんしやむら}から芸備線^{げいびせん}の汽車で行きました。

職場^{すいじば}の炊事場^{すいじば}にいたその時、「ピカツ」と二度光り、天井^{てんじやう}が下がり、事務所の戸^{たか}が倒れ、下敷^{したじ}になりました。

私も、みんなも外へ出ようと急ぎました。ようやく這^はい出た時には、外は真っ暗でした。

それから少しして、元の明るい朝に戻^{もど}りましたが、血だらけになった行員が目の前に立っていました。助けを求める人もいましたが、私にはどうすることもできず、困^{こま}ってしまいました。

その姿^{すがた}は、今でも思い出します。

帰りは、広島駅から芸備線^{げいびせん}の汽車が



広島駅

破壊された駅舎前のバラックの出札所は、多くの人々で混雑した。

(川本 俊雄撮影／川本 祥雄提供)

出なかつたので、歩いて矢賀駅まで行き、そこから乗りました。

自宅に戻った私は、妹に頭を洗ってもらいましたが、ガラスと真っ黒い汁が出てきたそうです。私は戸の下敷きになったおかげで火傷はなく、左手をガラスで切ったくらいですみました。その後痛みがあったため、医院へ行つて診てもらったら、ガラスが入っていたので、切つて出してもらいました。

翌日から、一緒に通勤していた何人かの人は、見なくなりました。

月日が経つのは早いもので、あれから七十四年……長生きさせてもらったことに感謝しながら、今は主人とともに、入園した倉掛のぞみ園で、被爆の体験を語っています。



戦争のあった話

白井 ヨシコ（八十九歳）



被爆地……舟入幸町（爆心地より一・五km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……兄

現在の病状……気管支喘息・慢性心不全

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は十五歳でした。舟入幸町の自宅で、父、兄夫婦と姪の五人で暮らしていました。母は、体の不自由な兄とともに疎開し、妹、弟も疎開しておりました。

八月六日の朝、いつものように食事を済ませ、義姉が朝食を片付け、軍需工場の事務に出かける身支度を整えていた時に、急に窓の外が「ピカッ」と光り、思わず両手で目を覆いました。それから「ドーン」と大きな音がし、私は気を失ってしま

いました。義姉ぎしの声で我に返り、顔を上げると火花が上がり、着ていた服はボロボロになっていましたが、幸いにもケガはありませんでした。

つぶれた屋根の上にいた近所のおじさんに、義姉ぎしと姪めいを助け出してもらい、その後、今干したばかりの洗濯物せんたくものに着替きがええようと三人で裏手うらてに行きましたが、ブロック建ての家はなくなっていました。

義姉ぎしと江波えばに逃げる途中とちゅうで、近所に嫁いだ姉と合流し、サトウキビ畑かきの陰かくに隠れて、身をひそめていました。

父は、馬車で藁工品わらこうひんを軍の施設しせつに運ぶ仕事をしていましたが、当日、己斐こいにいたため助かりました。舟入幸町民ふないりさいわいちやうみんの避難先ひなんさきが五日市いつかいちだったため、避難ひなんした私達は、二日後に父と再会することができました。

宇品の造船所うしなぞうせんじょに勤めていた兄は、その日にかぎって建物疎開たてものそかいに出ていたため、ピカにあいました。

父と義姉ぎし、姪めいと私の四人で、軍の病院近くの倉庫に行き、三列、四列と並ならべられた負傷者ふしょうしゃのむしろをめくりながら、既に亡すでくなっている兄を見つけました。火傷やけどを負っており、手がかりは、ズボンに付けた名札でした。

父の馬車に遺体^{いたい}を乗せ、舟入^{ふないり}小学校^{しょうがっこう}近くの畑で、壊れた家屋^{かおく}の廃材^{はいざい}を使^はって兄を焼^やいてあげました。唯心寺^{ゆいしんじ}の和尚^{おしょう}にお経^{きやう}をあげてもらいました。

それから、東広島にいた叔父^{おじ}の家^なを空^そけてもらい、疎開^{そかい}から戻^{もど}ってきた家族も一緒に、叔父^{おじ}に教^{おし}わりながら慣^なれない百姓^{ひゃくしやう}で生計^{せいけい}を立て、十九歳^{さい}で私は嫁^{よめ}ぎました。

苦しい時代ではありましたが、みんなが寄^より添^そって生きていました。時代は変わりましたが、人との繋^{つな}がりを大事^{だいじ}に生きてほしいと思います。



舟入本町付近から東を望む

左手前、爆風により破損した木製電柱と建て替えた木製電柱。
右側の電線には外れた電線が垂れ下がっている。

(米国戦略爆撃調査団撮影／米国国立公文書館提供)

私と原爆

永中 スミエ（九十三歳）



被 爆 地 …… 横川町（爆心地より二・〇km）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 甲状腺機能低下症・慢性膵炎

被爆時の状況及びその後の生活

私は、八人兄弟の末っ子でした。父を小学三年生の時に亡くし、兄二人は兵隊に出ていました。当時は西区楠木町で、母、姉二人、兄嫁、姪と暮らしていました。

私は二十歳で、横川町の軍需工場で陸軍の靴を作っていました。

八月六日は作業中で、突然、オレンジ色の光線と爆風を受けるとともに、しばらく気を失っていたのだと思います。助けを求める泣き叫び声で目を覚まし、何とか

屋外に逃れることができましたが、あまりの変わりように言葉もなく、ただ立ち尽くして、我に返ることもできませんでした。

私は顔面血だらけでした。爆風の影響でできた額の陥没は、今も残っています。火傷で、両手を前にかざした人々が行列を作り、はちきれそうなほど腫れあがった人や水を求める人々がたくさんいました。見たこともない光景が理解できず、これが原爆の怖さかと実感しました。

当日は、ただ逃げるばかりで、夕方、快くしてもらっていた姉の友人を頼って古市に行き、しばらくお世話になりながら、家のあった楠木町に数日通いました。ようやく家を見つけましたが、二階は吹っ飛び、一階の柱だけが残っていました。

家族の無事は、避難所のメモで知りました。八月十五日、ようやく父の実家の佐伯町で家族と再会を果たし、無事を確かめました。

おびただしい死者の始末に重油をかけ、絶え間なく続くその灯で、体を洗ったこともありました。真実を忘れてはいけない、また忘れられない記憶です。

原爆被爆者の願いを無にしないで、核廃絶に取り組んで下さい。今、私は学生達に被爆体験を伝えています。



全焼全壊した楠木町

三篠橋西詰（太田川右岸）下流側から南西（横川橋）に向って。全焼全壊地区の北の端に近いこの地区は、町工場や木造の住宅が密集していた地域で全て焼き尽し、僅かにコンクリート製の防火用水槽と、ランドマークに見える鉄骨アーチの横川橋だけが焼け跡に残った。写真左は太田川、遠くの山は己斐方面。

（尾木 正己撮影／広島原爆被災撮影者の会提供）



被爆当時の様子と私の生い立ち

名越 ミヨコ（九十五歳）



被 爆 地 …… 入市（基町）
もとまち

当時の急性症状 …… 高熱

家族の死亡 …… 父

現在の病状 …… 慢性心不全・老年期認知症

被爆時の状況及びその後の生活

当時、私は二十一歳で、広島赤十字病院の看護婦として、疎開分院となった東城
とうじょう
高校に配属されました。

八月六日は、お昼の汽車で一人の患者が来られ、大声で「広島は全滅です。」と泣
なみ
きながら、叫ばれていたことを覚えています。

すぐに、救護班を編成し、広島へ向かいました。途中から汽車も走らなくなり、
とちゅう

暗い夜道よみちを仲間全員沈黙ちんもくし、陸軍病院りくぐんびょういんを目指して歩きました。全く何も見えない中、青い火があちこち、ちよろちよろ燃えていました。七日朝に陸軍病院りくぐんびょういんに到着とうちやくしましたが、跡形あとがたありませんでした。

そのあと、沢山たくさんの患者かんじゃが収容しゅうようされている比治山ひじやまに向かいました。比治山ひじやまには、足の踏み場ふまばもない程、ぎっしりと負傷ふしやうした方が詰め込まれており、私は中腰ちゆうこしで治療ちりやうしなければいけませんでした。

ガーゼを取り替かえようとすると、次々つぎつぎにうじ虫が出てきます。うじ虫が体の中を奥おくへ奥おくへと進んでいくので、中々なかなか取り除くことができません。完全に治療ちりやうもできないうちに、次の負傷者ふしやうしやの治療ちりやうを始めなければならぬ状況じやうきやうでした。「生きてね。」「絶対に生きてね。」と、話かけて去らなければいけなかったのです。患者かんじゃは、堤防ていぼうで寝ねかされていて、十分な食糧じよくりやうも注射しゅうしもなく残酷ざんこくな毎日で、十分な治療ちりやうができなかったことが、今でも悔くやまれます。

原爆投下げんぱくとうかから十五日目、陸軍病院跡地りくぐんびょういんあとちには、片膝立ちかたひざの姿勢しせいのままの焼死体しょうしたい、太田川水面たがわすいめんには、母が子どもを抱だき、離れず寄より添そったままの遺体いたいがそのままありました。

今でも看護かんごしていた当時を思い出し、あの時、生きていた兵隊さんや背中せなかにガラスの破片はへんが刺ささっていた子どもを想うと、涙なみだがポロポロと流れてきます。私の父は原爆げんばくで亡なくなり、母は一年も経たたないうちに、私を含め七人しちにんの子どもを残のこし去さっていきました。

私は、看護婦かんごふとして患者かんじやと向き合う一方で、残された兄弟を必死で育てました。

私の背中せなかにも、濃い紫斑しはんができています。

戦争は絶対いけません。

これから世の中で、戦争はあつてはならないことです。



広島第一陸軍病院の焼け跡

木造だった広島第一陸軍病院は、全壊、全焼して跡形もなくなった。当時六百余人の職員がいたが、大半は行方不明と報告されている。正面奥左から火山、武田山。

(米軍撮影／広島平和記念資料館提供)

原爆に遭って

門出 マサコ（九十一歳）



被 爆 地 …… 中広町（爆心地より一・五km）

当時の急性症状 …… 発熱、脱毛、歯茎の出血

家族の死亡 …… 弟

現在の症状 …… 狭心症、変形性膝関節症

被爆時の状況及びその後の生活

被爆当時、私は十六歳で三和銀行に就職していました。

八月六日、中広の自宅で身だしなみを整えていたらB 29の爆音が聞こえ、光とともに大きな音がして、目と耳を塞ぎ伏せました。私は家の下敷きになりましたが、梁と梁のすき間に挟まれたため助かりました。一緒に住んでいた親戚に助け出され、擦傷や打撲を負っていました。

家は全焼全壊し、皆で三滝の竹藪に裸足で逃げました。道中、蚊帳を羽織って、焼けた皮膚をぶら下げて逃げる沢山の人々、ひっくり返ったまま焼けている馬、悲惨な光景を見ましたが、その時は怖いとは思いませんでした。

竹藪の中で、午前中なのに真っ暗になったと思うと、雨が降り出しました。偵察機の低空飛行をする音も聞こえ、雨が止むと明るくなりました。

家に戻ると、全てが崩れて焼け、瓦も焼けて白くなっていました。近所の女の子が、家の下敷きになり、白い足だけが見えていましたが、どうしてあげることもできませんでした。

土橋へ建物疎開に出ていた十二歳の弟が帰って来ないので、翌日、己斐や土橋、舟入など、死んでいる人を跨ぐようにして探しましたが、見つけることができませんでした。今でも帰ってくるのではと思います。そして胸が苦しくなります。

その後、田舎の祖母宅（山県郡千代田）に身を寄せていました。八月十五日、お墓参りに行く途中の真っ白な田んぼ道を歩いているとき、終戦の知らせを聞きました。その頃から、歯茎から出血したり髪の毛も抜けました。

戦争は絶対にあつてはなりません。人間同士がお互いに戦って、殺しあいをして

はならないのです。戦後、続いている平和が、これから先も守られていくことを心から願います。



中広町から北東方向を望む

写真左から広島市立中学校講堂、広島市信用組合本部、広島県農業会倉庫、横川倉庫、中国製砥所と書かれた煙突が写る。

(米国戦略爆撃調査団撮影／米国国立公文書館提供)



被爆の3日間

山口 敏人（九十二歳）



被 爆 地 …… 二葉の里（爆心地より二km）

当時の急性症状 …… なし

家族の死亡 …… なし

現在の病状 …… 高血圧症、鉄欠乏性貧血、高尿酸血症、緑内障

被爆時の状況及びその後の生活

被爆当日

一九四五年（昭和二十年）八月六日。空はよく晴れて、陽に照らされて白く輝く綿雲が眩しい朝だった。広島駅の裏山へ、本土決戦のための食糧貯蔵庫を作る作業を始めてから三日目。白い色の作業服に着替えて、西部第六部隊の兵舎を後にした。作業現場へ資材を運ぶため、材木を担いで坂道を少し上った。重いので資材を下して休んでいた。

するとB 29の爆音ばくおんが聞こえ、警戒警報けいかいけいほうが解除かいじょになつてゐるのにおかしいと、二人で話しながら上空を見上げると、北のほうへ向かつて飛行してゐるのが見えた。ほんのちよつとして、パチパチと東練兵場ひがしれんべいじょうの私たちのすぐ前を、火の雨が西から東へ走つた。私は「伏せ」と言つて土を掘つた側溝そつこうに飛び込み、目と耳を両手で覆つた。機銃きじゅう掃射そうしやとばかり思つてゐた。しばらくして、伏せてゐる顔を覆つた手に向かつて、溝の砂すなが吹き上げてきた。立ち上がつて見ると、一緒にいた上等兵じやうとうへいは帽子がない。探さがしてみると二十メートルも先に飛ばされてゐた。上半身じやうはんしん、裸はだかだつた上等兵じやうとうへいの背中には、見る見るうちに大きな水ぶくれが左右にできた。足は軍靴ぐんかを脱いでいたため、足の親指つめの爪がはがれてゐる。爆風ばくふうにはね飛ばされ、倒れたときの擦過傷さつかしやうで皮膚ひふがめくれてゐた。まず我々われわれの指揮しきをとつてゐた兵長の所へ行こうと、二人で歩いた。洞窟どうくつまで着くと、兵長は「あれは何だつたのか、光つて大きな音がしたが。」と、私たちに聞いた。聞かれても耳をふさぎ、目を覆つてゐたので、何も見えず、音も聞かず、返答こたまに困つた。兵長は洞窟どうくつにいたので、無事だつた。

とにかく、本隊ほんたいへ一応帰つてこようと、山を下り練兵場れんべいじやうの所まで来ると、「今、街の中は歩かれたもんじやない。一面火の海じや。」とのことで、再び洞窟どうくつまで引き返し、様子を見ることにした。

原爆^{げんぱく}が落ちたであろう直後に、防空壕^{ぼうくうこう}が燃えていたのを見たし、東方にあった東照宮^{しょうぐう}の屋根に火がつき、燃え上がっているのも見えた。東練兵場^{ひがしれんべいじょう}で演習をしていた兵士も、草の中に伏せていた者は無事だった。兵を指揮^{しき}するために、手を上げていた者は手を焼かれ、立って走っていた者は帽子^{ぼうし}を飛ばされ、帽子^{ぼうし}の境目^{さかいめ}より下の頭髮^{はう}は焼かれて無くなり、見ると、いかにも奇妙^{きみょう}なものだった。道に転がっていた防空頭巾^{くうずきん}に、火がついて燃え上がっていた。洞窟^{どうくつ}まで引き返していると、下から一般人^{いっぴん}人がどんだん上がってくる。逃^にげてきた子どもの一人が、回虫^{かいちゅう}を次から次と喉^{のど}に手を突^つっ込んで引^ひつ張り出す。宇品^{うしな}から逃^にげてきたという婦人^{ふじん}（下着姿^{したぎすがた}のまま）と子ども。婦人の体には、小さなガラスの破片^{はへん}が無数に突きささっている。子どもがハンカチを濡^ぬらして、拭^ふき取るようにしてガラスの破片^{はへん}を取っていた。襪^{ふんどし}一つで、工兵隊^{こうへいたい}のところで作業をしていた人々^{ひとびと}は、手を前に差し出し、裸足^{はだし}のままが上がってくる。腕^{うで}から下の皮は垂^たれ下がり、指の間から濡れ紙^{ぬれみ}を下げたようにぶら下がり、脚^{あし}は股^{また}のところから皮が破れ足首のところまで下がり、ストッキングを引き下ろしたようになっていた。その様子を見た私たちは、気分が悪くなり、昼食に持って来^きていた飯盒^{はんごう}を、集^ひまつていた人々^{ひとびと}に食^くべてもらった。

午後の四時か五時だったと思う。負傷^{ふしょう}した上等兵^{じょうとうへい}を救護所^{きゅうごしょ}に残して、二人で六部^{ろくぶ}

隊へ帰ってみることにした。街の中は、家が焼けた後なので熱い。道に止めてあった自転車の上の玉葱が、蒸し焼きになっていた。家の中に居たであろう人の白骨が、あちこちで見られた。家が焼け、建物が崩れた街は目印がなく、とても歩きにくかった。本隊に着いたのは夕方だった。

西部第二部隊（歩兵）の前まで来ると、「水をくれ、水をくれ。」の聲が、方々から聞こえる。水筒を持っていた私たちは、仕方なく水筒のまま上げて、その場を後にした。西練兵場のあちこちに、歩兵砲を仰角六十度位に据え付け、回りに円形に塹壕を掘り、空からの敵に向かって待機していたものと思われる。その兵士たちは顔から血を流し、ただ茫然と座っているだけだった。今、考えてみてもその理由はわからない。

二部隊と西練兵場の道を通り抜け、私たちの部隊へ帰っていった。営門を入ったすぐ左の松の木の上に、兵士が一人腹を下にして衣服は破れ、半裸の状態でひっかかっていた。衛兵の屯所は跡形もなく吹き飛ばされ、銃弾が散乱していた。営庭には、焼かれて全裸の兵士がごろごろと転がっていた。私の中隊の班長室のあったところには、班長さんであろう人の白骨があった。衣服の焼けた兵士の身につけていたものは、軍靴の踵の部分だけだった。

焼かれた兵士の裸の姿は、崩れることなく張りつめ、ピカピカと光っていた。

私達のいた山には雨が降らなかつたが、六部隊一帯は原爆が炸裂後、物凄い雨が降つたとのことだつた。雨にあたつた人々は、寒いと言つて防空壕へ入つていた。将校マントを着た部隊長の姿も見えた。敗軍の将といった感じがしたのを、今でも覚えてゐる。

防空壕の床は、雨水がいっぱいたまつていた。飼われていた鶏も全部死に、羽根が雨に濡れて哀れな姿になつていた。兵舎という兵舎は、ことごとく焼け崩れ、厩舎に繋がれていた軍馬は厩舎もろとも焼かれ、息絶えていた。



山陽本線、神田川鉄橋東側の線路敷より南東を望む

(米国戦略爆撃調査団撮影／米国国立公文書館提供)

負傷者ふしょうしゃを集めようということになり、営庭えいていの砂すなの上に連れてきては寝ねさせる。敷しき物ものとて、何もなく広い砂すなの上に寝ねさせる。重傷者じゅうしょうしゃを病院へ、というので輜重隊しちじゅうたいの使う車くるま。輜てつは、鉄てつがはめ込まれた昔の荷車同然。台車は木を組んだもの。敷物しきものは何もなく、その上に重傷者じゅうしょうしゃを乗せ、落ちないよう縛りつけ、ごろごろと引いて牛田方面の山の中へ連れて行つた。着くと、「連れて来てもいっばいで、引き受けられない。」とのことだった。連れて行つた兵士は意識はなく、胸むねから背中せなかへ穴あながあき、息をする度に、「ゼーゼー」と音がする。断られても、なす術すべがなく、黙だまつて置いて、空車を引いて帰つた。帰つてみると広い営庭えいていに、負傷ふしょうした兵士が四列にずらつと寝ねかされていた。あまりの数に驚おどろいた。私たちは呻うめき声と「水、水」の声の中で、ただただ、見守るだけだった。見回つて、息絶いきたえた兵士を引き出して、一カ所へ集めることを夜よを徹てつして行つた。朦朧もうろうとして、ふらふらと歩き出す者、寝ねかされている兵士の上も、何もあつたものではない。兵士につまづいて、材木を倒たおすように倒れる兵士。数名の者では、それらの兵士すべてを見ることはできなかった。頭の皮が半分剥はぎ取られ、頭蓋骨ずがいこつがむき出しになった兵士の歩き回つた姿すがた。そして、夜明けに息絶いきたえたこと。今でもはつきりと頭に刻きざみ込まれ、忘わすれることができない。

被爆第二日

二日目は、六部隊の隊員で負傷して、連絡の取れない者を探して歩くよう命を受け、前夜の不眠をおして、広島市内の倒壊を免れた建物を中心に、西に東に炎天下を歩き回った。縮景園の前では、無傷だけれども母親が幼児を抱いたまま、親子とも息絶えていた。今なお心に焼きついて、忘れることはできない。道端の浅い溝に、幼年学校の生徒が帽子も服も、きちんと着けているのに、息絶えていた。

被服廠跡の崩れた土台の上に、腰を下ろした二人の娘さんに出会った。一人は額が数センチにわたって裂け、骨が見えていた。「私の顔、どうなっているかしら……。」

「何、大したことはないよ。」と、ほかに答えるすべもなかった。

師団司令部の前を通った時、数名のアメリカ空軍兵士が、何事か話しながら、日本兵に護衛され、連行されているのに出会った。夕暮れ近くになって歩いてみると、日本兵二人が焼きトタンをガラガラいわせながら、引いて来た。見ると、裸にされ息絶えたアメリカ兵と思われる若い男性を運んでいた。その後、あの元気だったアメリカ兵は、どうなったか知る由もない。戦後一度も、被爆アメリカ兵捕虜の話を知ることがない。

戦争は、人の心を変えてしまいます。殺すか、殺されるか、憎しみの心を駆り立てます。教育の怖さをしみじみと感じます。

ある救護所で、被爆した下級生に出会った。話しによると、六日の朝、家屋疎開に出て、朝食の準備をしているところへ、「ドカン」と来た。気がついてみると、家の下敷きになっていた。「助けてくれえ」と叫んだ。しばらくして耳をすますと、そこそこで皆助けを呼んでいた。これは駄目だと思い、素手で天井を破り、屋根板を破り、瓦を除けて逃げたという話をしていた。大木に阻まれた人々は、逃げる術もなく、生き地獄の中に命を落としていったと思われる。部隊の焼け跡で、白骨となった人々を見ている私にとっては、容易に想像できる。

被爆第三日

被爆第三日目は、朝から遺体の収容に当たった。遺体は、軍服を着けたものはほとんどなく、焼け残った軍靴が足の踵についていただけだった。

何といっても暑い夏のこと、足の方を持ち上げると、口や鼻から腐敗した内臓が出てくる。二人で頭と足を注意深く持ち上げ、急造の焼けトタンの担架で、焼け残っ

た建物のところへ運んだ。まさに死体の山である。数を数えることはできなかったが、一つの部隊が壊滅的損害を受けたのだから、死体は数百に上ったことは確かである。

広島城の壕にも、遺体は浮かんでいた。遺体の収容は、大変な苦労だった。とにかくにも、全員（生き残り）で力を合わせて収容し、焼失を免れた材木を遺体の上に重ね、ガソリンを撒き火を放った。火が燃え上がると、若い兵士達の遺体は、自らの脂で凄い勢いで焼けていった。

白骨と髑髏のころころ転がる建物跡に、夏の夜の月が淡い光を落とす。衛兵として立った私には、今でもはつきりとその時の様子が思い出され、忘れることはできない。

